

# 光岳寺梅花講に出逢う



▲ 鈴木老師の運転する除雪車の大きさにびっくり。

如月の夕方六時、住職の鈴木老師は除雪車のエンジンを轟々とならしながら境内の雪をはいていた。

「朝片付けても夕方にはまた積もるから」と鈴木老師。小国町の雪は深い。参道からは講員さんを温かく迎えるかのようには本堂の明かりがぼんやりと浮かび上がっていた。



▲ 練習ではテーブルレコーダーを持参

「十年前くらいからだったかなあ」お茶をいただきながら話を聞かせていただく。現在は四期生まで入り、「大島」「にわとり」「ひよこ」「たまご」と講員さんによる愉快的なクラス分けを教えてくださいました。



▲ コの字になって熱心に鈴木老師の話をきいていました

「御詠歌は面白い」皆口を揃えてうなづくが、途中でやめてしまおうかと思ったときもあったという。共通していたのは、初めは覚えるのが大変だったということだった。それでも続けていくいいこともあった。「今が一番いい」これもまた皆に共通していることだった。

⇒興味のある方は小国町、光岳寺梅花講【0238-62-2129】まで連絡ください。



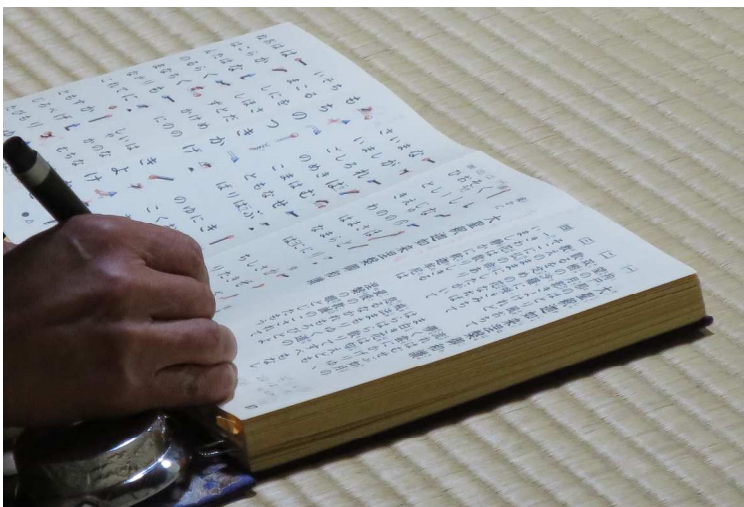
▲ 季節ごとに課題の曲が変わります

「おっさまに注文は？」冗談交じりに聞いてみた。「おっさまやさしくて」と講師さん。いいたいことを何でもいえる雰囲気は講師さんにとって励みになる。



▲ お茶のみ話も楽しみの一つ

平成二十七年度の全国奉詠大会では、大野さんに詠題を務めていただいた。「声が出なくなるのが心配で」、心配とは裏腹に大成功だったことを皆で振り返る。緊張のあとに見えたのはゆっくりとした穏やかな風景だった。



▲ 皆さんとても勉強熱心です

光岳寺講では月二回練習がある。練習だけでなくお茶飲み話も盛り上がる。大変なのは毎年冬に受検する検定会。その期間は何年経っても楽になるというものでもないという。  
「そうはいつでも案外皆さん度胸があるんですよ」と詠範さん。「からだがいふことを聞かないこともあるけれども、毎回お寺に来るのが楽しみで」皆口を揃えていう。楽しくなければ続けることは難しい。

⇒興味のある方は小国町、光岳寺梅花講【0238-62-2129】まで連絡ください。



現在の一期生が講師としてスタートを切ったのは十三年くらい前。検定のためというよりも供養をしたいがために覚えようというのが始まりだった。「お念仏のときにきいて」、「母から道具を譲り受けて」、動機はさまざまだけれども、亡き人の供養をしたい気持ちが始まりであったのは皆共通している。

「ところが、旦那さんがなくなりお唱えしようとしても涙があふれてきてそれができないんです」

「悲しみの中でしばらく眠れなかった時期もあったけれども、寝る前に梅花のテープをききながら眠りにつき、少しずつ癒されていった」、ある講師さんは当時の状況について話す。テープをきいているうちはその歌詞に泣けるのだけれども、きいているうちに自然と心が落ち着いて眠りにつく。起きたころにはテープは止まっている。楽しいときも辛いときも梅花が心のよりどころとなっていることを教えていただいた。「身体の動くうちは続けたい」と決意をきく。

光岳寺講では皆テープで録音しながら講習を受けているのが日常風景。涙あり、笑いあり。旦那さんを亡くしている人も多いのだけれども、梅花の練習を通じてその体験を共有されている。元気の秘訣もこの集まりにあった。「大変なことばかりじゃない。楽しむときはうんと楽しむ」梅花はもちろん、お酒やカラオケ、さまざまな行事をとことん楽しむ。何か特別なことをやるのではなく、安心と元気は常に普段の生活のなかにあることを教えていただいた気がする。



光岳寺講の皆さまありがとうございます。ありがとうございました。

※宗務所企画 「隣の梅花講」、次は自性院講へうかがいます。

(このたびの取材は平成二十八年二月一日にさせていただきました。)

⇒興味のある方は小国町、光岳寺梅花講【0238-62-2129】まで連絡ください。